
そばにいて

みもこちと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そばにいて

【Nコード】

N4309T

【作者名】

みもこちと

【あらすじ】

姉の義理の息子をひきとることになった酒場の女主人チャニ。子ども嫌いでいやいや引き受けた彼女だったが息子のサジャは予想外に大人しい子で……。 一話一話の長さがまちまちで大概はとても短いです。

死んだ姉の息子をおしつけられた。

わざわざ山向こうの村から、姉の旦那の連れ子のため私とは血がつながってないにも関わらずだ。

父親は妻が死んですぐ蒸発したらしい。

遠くの街で愛人とよろしくやっている噂を聞いた。ふざけんな。

あっちの祖父母に引き取ってもらえよと思ったのだが、どうやら馬が合わなかったので、私にお鉢がまわってきたそうなの。年寄りは孫をかわいがるものだと思っていたのだが。

正直、勘弁してほしいと思う。

私は子どもが苦手だ。

人のコンプレックスを悪気なく抉ってくるところかが特に。大人げないと言われようが無理なのだ。

しかし、両親が既に亡くなっており、村の唯一の酒場を受け継いで困窮することもなく気ままな一人暮らしを行っていた私は都合が良いと思われたようです。

山向こうの村と私の住む村の二人の村長に土下座の勢いで頼み込まれた。

下手に断ると角が立つではないか。

援助は惜しまないということで、義理の甥っ子を引き取った。

二十の身空で六歳の子持ちである。
これは結婚が遠のいたな。

まあそれは別にどうでもいい話だが。

「はじめまして、ぼくの名前はサジャです。これからよろしくおねがいします」

この子どもが丁寧な頭を下げて挨拶したことに私は驚いた。そこらの子より、私より、ずっと礼儀正しいではないか。

祖父母と上手いかなかったと聞いて、わがまま坊主かも思っていたが、認識を改めないといけない。

「私はチャニ。よろしく。おばさんって呼んだら怒るから」

「はい、えつとチャニさん」

「よろしい」

笑いかけると笑顔が返ってきた。

私がサジャと会ったのはたった一回、姉の結婚式でだけだった。そのときの印象は父に似ていない赤茶の髪をしているな程度だ。

今よくよくサジャを見ればかわいらしい顔をしている。

うるおぼえの姉の旦那とは似ていないように思われた。たぶん死んだらしい実母似なのだろう。

観察するとサジャの顔が赤くなった。

照れ屋なのか？

思っていたよりずっと好印象で私とサジャの生活は始まった。

得意の酒場料理を作るとサジャは嬉しそうで悲しそうな複雑な顔をした。

「お母さんがよく作ってくれたんです」

お母さんとは私の姉の方だろう。

姉妹とも幼い頃から酒場を手伝っていたから、教わった料理も同じである。

「お母さん好きだった？」

思わず口をついて出た。

「はい。お父さんより、ずっと優しくかったから」

悲しげな笑みで言われて、私まで悲しい気持ちになりそうになって慌てた。

「食べよう。きっと姉さんのと同じ味だと思うから」

言って二人でご飯を食べた。

サジャがおいしいです、と言ってくれて、客から言われ慣れているはずなのになぜかずっと嬉しく感じた。

一人じゃないご飯は久しぶりだな、となんとなく思った。

「おはようございます」

寝起きに声をかけられて驚いた。

酒場は昼頃に開けて夜遅くまでやっているから、私は基本的に朝寝坊だ。

「おはよう」

言葉に違和感を覚えて、こんな朝の挨拶もずいぶんしていなかったのだな、と思つてなんだか笑えた。

「どうかしましたか？」

「ううん、なんでもないの」

いきなり笑い出した私に、サジャは不思議そうな顔をしていた。

おはようと言えるのはずいぶん、嬉しいことだったと、私は思い出す。

どうやら作ってくれたらしい朝ご飯の匂いを感じながら私はベッドからおりた。

寢室の隣から泣く声が聞こえた。

サジャの寝る部屋だ。

抑えて抑えて、でも押し殺しきれないような泣き声だった。
ごく小さな声だったので寝る妨げにはちっともならなかったが、無視はできなかった。

扉をノックする。

サジャが慌てたような声をだした。

「ごめんなさい、チャニさん。すぐ黙りますから」

言い方に違和感を感じる。

思い出したのは少年の祖父母だった。

扉を開けて中に入る。

「違う、サジャ。私は怒ってるわけじゃなくて」

何か言おうとするが言葉にならない。

私はサジャの目に涙が浮かんでいるのを見て、衝動的に小さな体を抱きしめた。

サジャは一瞬、体を固くして、すぐにすぐるように泣き出した。

姉が死んだと聞いたとき、私は泣いた。

一晩中、一人で泣いていた。

この少年も悲しかっただろうに、もしかすると泣くことすら許してもらえなかったのだろうかと思うと胸が痛かった。

私はサジャが泣き止むまでずっと抱きしめていた。

風邪を引いた。

酒場の入り口に本日休業の板をかける。

サジャが学校に行ったあと、いつも通り寝てたら治るさ、とベッドに入った。

額に気持ちの良い冷たさを感じて意識が浮上する。

目を開くと泣きそうな顔でこちらをのぞきこむサジャと目が合った。

「チャニさん！」

私の名前を呼ぶサジャの顔に強い安堵が浮かぶのを見て、そういえば姉は病気で死んでいたことを思い出した。

ずっと握られていたらしい手に、少年のすぐる気持ちをを感じる。

声を出そうとしたがかすれて音にならなかった。

逆の手を伸ばして、怖がらせてごめん、と安心させるように、サジャを撫でた。

翌朝、ずっと看病してくれたサジャに風邪が伝染ってしまい、私はこれまた久々に人の看病をした。

サジャは物覚えが良かった。

酒場の仕事もすぐに覚えて私の手伝いをよくしてくれる。

やはり勉強もできるようで近場の町の学校の先生から誉められているらしい。

ちなみに酒場の常連からの情報だ。

勉強が嫌いで酒場以外のことはまるつきりできない私とは大違いである。

最近できた恋人にちょっとばかし言ってみたら、役に立つ小間使いができて良かったじゃないかと返された。

なんだかとても嫌な気持ちになったのでその日に別れてしまった。

ある日、学校から帰ってきたサジャは私に白い花をくれた。

大切な人にあげる花だと同じ学校の女の子から聞いたそうだ。

「だから、チャニさんに」

あまりに嬉しかったのでぎゅうと抱きしめてしまった。
母性本能というやつだろうか。

サジャは照れながらも、抱きつき返してきてくれた。

かわいいなあとと思う。

ベッドの横の台の上に、押し入れから引っ張り出した何年ぶりか昔の花瓶を置く。

サジャからもらった花を挿して、それを見ながら私は緩む口元をおさえきれずにいた。

次の日、私は村長からの援助を止めてもらうことにした。

今までもらっていた分もこれから返していくと伝えた。

もともと生活には困っていなかったのだ。

このお金は私がサジャを育てる代金としてもらっていたものだった。

サジャは私の子で家族だから、もうお金はいりませんと言うと、村長は破顔して私の頭を撫でた。

懐かしくて暖かい感触にひどく照れてしまった。

家に戻ると学校が休みだったらしくサジャが帰ってきていた。

「おかえりなさい。チャニさん。どこかに言ってたの？」

おかえりなさいの言葉と大分敬語が抜けてきたことが嬉しい。

「ちょっと村長のところ」

私がサジャを引き取るにあたり、村長が仲立ちしたのを知っている少年は、目に見えて顔を強ばらせた。

その顔が悲しくて、安心させるように抱きしめる。

「これからの確認をただけよ。サジャと一緒にいれるように」

少しの嘘をまぜて、伝えたとサジヤは体の力を抜いてもたれかかってきた。

感じる信頼に誰よりも私がほつとする。

サジヤは私の家族になったのだ。

サジャは学校でもてるらしい。

常連の男性の娘が言っていたそうだ。

その娘自身もサジャに夢中らしく、私が笑って嫁にくる？と言って
みたら、真顔でチャニのところは嫌だと言われた。

酒場とか抜きにして私のような姑がいるところは嫌だそうだ。
反論できない。

自分がサジャの嫁取りの邪魔になろうとは・・・！

うなだれながらもサジャがもてるということを考えてみた。

確かにサジャの見目は良い。

赤茶の髪はふわふわしてるし、黒い瞳も丸くかわいらしい。
あれだ、上目がちにこっちを見上げてくる姿とか頭を撫で回して愛
でたくなる。

・・・変態っぽいからやめよう。

自分の子って本当にかわいく見えるものなのだな。

しかし実際にサジャはよく贈り物をもらってくる。

今日もお土産ものがたくさんだった。

「ただいま、チャニさん」

「おかえり、サジャ。今日も多いわね」

紙袋一杯に詰められているのはほぼお菓子である。

中に私の好物があったりすると、サジャは私の口に手づから入れてくれる。

私が調理中で手が使えないことが多いからだ。

「チャニさん、どうぞ」

「うん」

飴を口でころがしながら、私はこれがサジャのたらしの手口か・・・！と思った。

10（後書き）

これから甘くなるよう頑張ります。

酒場を経営していると、たちの悪い客に毎日一人や二人は会うものだ。

大体は通りすがりの旅人や街からなんとなくやってきた新顔とかなのだが、たまに常連が悪酔いすることもある。

今回は前者だった。

しつこく絡んでくる新顔の客をいなしたら、そいつは給仕をしていた若いサジャに目をつけた。

わざとサジャをこけさせて笑いやがった馬鹿を、私は蹴り飛ばした。

まわりからはひゅー！と歓声があがる。

私が言うのもなんなのだが止めないのか年長者達よ。

相手が逆ギレして暴言を吐いたものだから、私もキレてしまった。言っちゃいけないことってあるよね。

更に数回、蹴っ飛ばしてやるとサジャからストップが入った。

「チャニさん、僕、大丈夫だから」

いじらしいなあと思うのだが、なぜか目が合わない。

馬鹿を追い出して、またサジャの顔をのぞきこむのだが、やはり目

が合わない。

ついにごめんなさい、と言ってサジヤは部屋に駆け込んでいった。
まった。

「え、き、嫌われた？もしかして私、サジヤに嫌われたの？流石に
暴力的すぎた？」

人目も気にせずあわあわと騒ぎ立てると、見守っていた常連に、あ
いつも男だったってことさ、と言われた。
女に守られちゃあな、とも言われた。

一番年嵩の老人が、明日になりや元に戻るだろう、と言ったのを合
図に皆、家に帰った。

半信半疑な私は酒場を片付けたあと、サジヤの部屋に突撃する勇氣
もなく、眠れないまま朝をむかえた。

「昨日はごめんなさい、チャニさん」
「いや、良いってことよー」

若干眠い私はサジヤの謝罪に間延びした口調で答える。

実は話しかけてくれたことに内心、小躍りしてたりする。

亀の甲より年の功だね。

サジヤが言うに、自分のせいで私が馬鹿に喧嘩を仕掛ける事態にな
ってしまい申し訳なかったのだと。

私は呆れた。

「悪いのはあの馬鹿よ。サジャが気にすることじゃないわ。元々ムカついてたしね。私のかわいい子をころばしやがって、もっと蹴ってやれば良かった！」

怒りを思い出していると、サジャはかわいい？と首を傾げた。

わかってないようだったので、かわいい、とサジャを示せば、彼はシヨックを受けたような顔になった。

「僕、絶対にチャニさんより強くなる・・・！」
「うん、頑張れ！」

なんだか決意したらしいサジャの頭を撫でたら困った顔をされてしまった。

あれ、なんか間違えた？

恋人から街でデートしようと言われた。
泊まりがいらしい。

露骨な誘いだ。

子どものお付き合いじゃないのだから、特に文句はないのだが、問題はある。

サジャを一人で留守番させるのが嫌だ。

私がない間に火事にでもなったらどうする。

いや、サジャは慎重な子だから、ありえない話なのだが。
しかし、地震がおきたら、強盗があらわれたら・・・。

泊まりはダメだ。

断ったが、それでも相手が引き下がらなかったので別れることにした。

結構続いた人だったので、それなりにへこむ。

夕方になり、サジャが帰ってきた。

「チャニさん、この野菜、村長さんの奥さんがくれたよ」

サジャのやけに嬉しそうな笑顔を見たら相手のことは三秒で忘れた。

かわいいなあ、もう。

もらった野菜にはサジャの苦手なものがまざっていた。
他にも特に好きな食べ物は見当たらないのに、なぜ満面の笑み。
食べられるようになったのだろうか。

首を傾げながら野菜炒めを作った。

12（後書き）

村長の奥さんは情報通のおしゃべり好き。

サジャは常連からサジャ坊と呼ばれてかわいがられている。

誰に対しても丁寧で優しく、素直なところがいいのだそうだ。

そうだろうそうだろう、と私は同意する。

自分が育てたからとはおこがまし過ぎて思えないが、サジャが誉められるととても嬉しい。

しかし、問題があった。

ここは酒場だ。

しかも昼は学校に行ってるサジャが給仕を手伝っているのは夜だ。

酔っ払いの会話は非常に下世話なのだ。

はつきり言つと下ネタである。

かわいがられてる分、サジャは酒場の残念な大人達にいろいろ吹き込まれているようだった。

曖昧なのは内容をはつきりとは知らないからだ。

サジャは頭が良い子なので、その関係でわからないことがあっても私にピーってなあに？なんて無邪気に聞いて困らせたりしない。

私や姉は母によくやったなあ、と遠い目になる。

今日も常連はサジャ坊、と呼びながら小声で（私の耳に入れば怒鳴り込まれるのを知ってるので）何かしら教えている。

顔を真つ赤にさせるサジヤを見ながら、こうやって余計な知識を持つんだよなあ、昔の私みたいに・・・としみじみ思った。

そして将来のサジヤの恋人に合掌した。

13 (後書き)

こんなわけでサジャは早熟です。

私にはくされ縁が三人ほどいる。
一人は女、残り二人は男だ。

ちなみに全員既婚である。
幸せそうだなによりだ。

今日は村に隣接する森の森番に嫁いだシヨナがやってきた。
うまれたばかりの息子を背負って。

シヨナは給仕しているサジャを見つけて叫んだ。

「この子、チャニの子!?!」

早足で私に詰め寄ってくる。

「チャニつたら、いつ産んだのよ! 教えてくれたっていいのに。森に住んでると情報が遅くて困るわー。ねね、父親は誰なの? やっぱリリアン?」

私が反論する間もなく、きびすを返す。
赤ちゃんと目があつた。

シヨナは今度はサジャに走り寄って彼の顔を両手ではさんだ。

「きゃー! かーわーいーいー! んーでも、あんまりチャニに似てない?」

「・・・あ、当たり前です!」

状況を把握したらしいサジヤが珍しく大声をあげた。

「僕はチャニさんの子どもじゃありません!!」

・・・あ、やばい。

泣きそう。

「ええ! そうなの! ? なあんだー、チャニがついに結婚したのかと。
・・・あれ、チャニ、外に何か用事?」

「店番、お願い」

「いいけど。なんでそんな変な顔して、チャ、チャニ! ? チャニ
ー! ? どこ行くのー! ?」

「チャニさん! ?」

私は酒場を出て走り出した。

14.1 (後書き)

よわよわチャニさん。

勢いで飛び出してしまつて、後悔する。
あれじゃ二人とも驚いただろう。

でもあの場にいたら泣いてしまいそうだったのだ。

わかつてはいたのだけど、本人から言われるときついものがある。

隠れたところでうずくまつた。

落ち着いたら帰ろう。

帰ったら、笑顔で変な行動を謝つて、そうだ、シヨナの赤ちゃんを
撫でさせてもらおう。かわいかったし。

「チャニさん！」

「ぎゃあ！！！」

いきなり声をかけられて心臓がひっくり返る。

振り向いたらサジャがいた。

走ってきたのか、息がきれている。

「なんで、泣いて、」

慌てて顔を隠す。

「いや、違つたよサジャ。これは、そう、目に砂が入つたのよ！」

言い訳が苦し過ぎる。

案の定、サジヤはごまかされなかった。

「・・・僕に言うのは嫌？」

悲しげな顔をする。

私は慌てた。

「違うわ、嫌とかじゃなくて」

なんて言えばいいのか。

親じゃないと言われて悲しかったと？

言ってサジヤに本当のことじゃないかと言われてしまったら？

いやだ、と思うのに口は動く。

「私じゃ、だめ？」

「え？」

「私じゃ、サジヤの親に、なれない？」

怖くて膝にある手が震える。

サジヤは驚いた顔をした。

納得したように頷く。

そして、私の前にしゃがんで、両手で私の頭を包んだ。

「ごめんなさい、チャニさん。あれはそんな意味で言ったんじゃない

いよ。僕はチャニさんに引き取られてすごく良かったって思ってる」

「・・・本当に？」

「うん」

ほっとして私はサジヤの小さな肩にもたれてみた。

「サジヤ、私達は家族？」

「うん。とっても大事な家族。だからチャニさん泣かないで。チャニさんは笑ってるほうがいいよ」

サジヤはたらしみたいなことを言う。

私は笑ってサジヤに抱きついた。

ちよっとそのままでいたあと、二人で一緒に酒場に戻った。

14.2 (後書き)

恥ずかしくてもだもだします。

シヨナは赤ちゃん背負って酒場で奮闘してくれていた。
サジャと平謝りする。

シヨナは笑って手を振った。

「別にいーよー。久しぶりの酒場で楽しかったし。解決したなら良かった」

何があつたかは聞いてこなかった。
シヨナは優しい女性だ。
ごく自然に気を遣う。

私はシヨナをカウンターに座らせてミルクを出した。

「ありがとう。ね、私、本当にチャニがやっとリアンとくっついたかと思つたのよ」
「有り得ない」

きやらきやらと笑うシヨナに私は即答した。

「チャニさん、リアンさんって？」

サジャがいぶかしげな顔で聞いてくる。

「ただの幼なじみよ。ただの。だいたいね、シヨナ。あいつは結婚しているでしょ」

相手は街に住む金持ちの美人な未亡人だったはずだ。
常連が噂していた。

「街の未亡人なら別れたって。旦那が直接聞いたらしいよ」
「またあ!？」

私は呆れかえった。
リアンが離婚したのは、これで三回目である。
しかも一つとして一年も保たない。

「バカすぎる!」
「本当にねー。いい加減、リアンも素直になればいいのに」
「あの、シヨナさん、ちょっと」

ずっと難しい顔をしていたサジャがシヨナを呼んで、店の隅に向かった。

二人で内緒話を始める。
私には聞こえない。

「うん! 頑張れサジャ君!」

シヨナがいきおい良くサジャの肩を叩いて話は終わったようだった。
何の話だったのだろうか。
気になったが内緒っぽかったので聞かなかった。

ただサジャとシヨナは仲良くなったようで、二人で力強い握手を交わしていた。

14.3 (後書き)

くされ縁1シヨナ。
くされ縁2リアン。

シヨナの赤ちゃんを抱っこさせてもらった。

恐る恐る首に手を当てる。

「ちゃんと首は座ってるから、そんなに緊張しなくていいわよ」
「う、うん……。わ、わわわ、わーわー……。！」

予想以上に柔らかくて壊れてしまいそうで小さく慌てる。

サジヤも抱っこしたそうだったので、ゆっくりと渡した。
私より手慣れてる様子に驚く。

「サジヤ、赤ちゃん抱っこしたことあるの？」

「うん、前の村にいたんだ」

「そうだったの？ 私が小さい頃は赤ちゃんいなかったのよね。大人になっただらなっただ、酒場の手伝いしてたし……。わ、つかんだ」

赤ん坊の手に指を出すと、ぎゅっとなつかまれて感動する。
話には聞いていたけどかわいいな！

「大人しい子ですね」

「うん、だからあんまり手がかからなくて。旦那に似たのかなー」

「寡黙なものねシヨナの旦那さん」

「あれは偏屈って言うのよ」

赤ん坊の顔もシヨナより少し旦那さんの方に似ているようだった。

でも髪の色はシヨナ似とかいいながら、赤ちゃんを構い倒した。

赤ん坊をシヨナの背中に戻す。

サジヤは酒場の中にいてもらって、外で二人で話した。

「そつえばサジヤ君って結局どうしてチャニのところに？」

「あ、言ってなかったわね」

話せば長くなることながらとこれまでのことを説明した。

「シーニヤ姉さんの・・・」

シーニヤは私の姉の名前だ。

シヨナは少し黙ったあと、私に目を合わせて優しく微笑んだ。

「私ね、サジヤ君がチャニのところに来てくれて良かったって思うわ。だってチャニ、前よりずっと幸せそうな顔してる」

私は照れてしまった。

シヨナの顔はいつかの村長を思い出す。

「うん、サジヤは私に幸せをくれるの。ねえ、シヨナ、子どもって偉大ね。私まるでお母さんになったみたいだわ」

シヨナの顔が苦笑に変わった。
ええ、なんで。

「・・・ま、うん、そうよね。十四歳差だもんね・・・」

「お母さんは言い過ぎ？姉くらい？」

「まあせめてそっちの方が」

煮え切らない感じである。

「まあ、いいか！サジャ君に頑張れって伝えてね！またねー！」

シヨナは元気に帰っていった。

まあ、また会ったときに聞けばいいか。

私は仕事をしに酒場へ戻った。

14.4 (後書き)

シヨナ編おわり！

最近、そんな性格じゃ嫁き遅れるぞと言われなくなった。

十六を過ぎて周りがどんどん結婚していく中、恋人はいても結婚はしない私に、酔っ払い共がよく野次をとばしていたのだが。

しかも私の顔を見るたび、まだ結婚しないのか、どこそこの息子が嫁を探して、とお節介に教えてきた村の八百屋の奥さんすら何も言わなくなった。

ついに諦められてしまったのだろうか。

憂鬱な気分でサジャにそのことを言ってみると、彼は首を傾げた。

「チャニさん、結婚したいの？」

「そういうわけじゃないんだけど・・・。あと数年経ったら二十五だと考えると切なくて。サジャ、私ってもう嫁き遅れ？」

「チャニさんは若いよ」

お世辞でも嬉しい！とサジャを抱きしめる。

サジャは小さな手を伸ばして、私の頭を撫でてきた。

「待っててね。僕すぐに大きくなるから」

早く大きくなって、私の手助けをしてくれると・・・！？
なんてできた子だ。

「うん、待ってる」

私が笑顔で答えると、サジヤも嬉しそうに笑った。

「約束だよ。チャニさん、絶対に待っててね。破ったら駄目だよ」

やけに念を押すサジヤに私はうんうんと何度も頷いた。

15 (後書き)

約束しちゃったー。

朝にふと、サジャの元いた村に行ってみようかと考えた。

窓を見れば、森の木々が茂っている。

この広大な森は村の北から東を覆いつくしていた。

村を東西南北に通る道の北にずっと進めば、シヨナの住む森番の家につく。

そして東の道を進み森を抜けると山があり、それを越えるとサジャがいた村だ。

どちらも馬車が通れない荒れた道で、山向こうの村となると、馬だと半日、徒歩では一日かかる。

しかも道は入り組んでいて迷いやすい。

だが、村同士の交流の為に月に一度、片方の村人の数十人が片方の村に売り物を持って訪れることが決まっていたので、徒歩を我慢すれば行く機会はいつでもあった。

明後日が山向こうに行く日だから、こんなことを思っただろう。

サジャの学校は休みのはずだし、酒場も休みにすればいい、飛び入り参加もできるはずだ。

なんて色々計画してみたのだが、どうしてもサジャに言い出せない。

サジャは遠慮して私に言えないでいるかもしれないのに出来ない。

「チャニさん、難しい顔してるけどどうかしたの？」

心配気なサジヤの声にはつとずる。

ずつと考え込んでしまっていたようだ。

サジヤは学校へ行く準備を済ませて私の前に立っている。

「ちよつと考えてたんだけど」

この勢いで言ってしまおう。

「明後日は山向こうの村に行ける日でしょう？サジヤは行きたい？」

行きたいなら私が連れて行って」

「行かない」

固い声で言葉を遮られて驚く。

「チャニさんは行きたい？」

逆に問われて私は慌てて首を横に振った。

「サジヤが行きたいかなって思っただけ、用事があるわけじゃないわ」

サジヤは申し訳なさそうな顔をした。

「・・・気を遣わせちゃってごめんなさい。でも、僕は向こうに行きたいと思っ
てないから気にしないで。時間だから、いってきます」

素早く外へ出て行ってしまう。

結局私は、サジャの行きたくない理由を聞くに聞けないままになった。

16 (後書き)

暗いのは苦手です・・・。
次はもっと楽しく！

嵐がきた。

比喻じゃなく文字通り。

風が強すぎて酒場のドアはガタガタしているし、叩きつけるような雨粒のせいで窓の外は見えない。

嵐がきたのは夕方だった。

村と町をつなぐ辻馬車はそのせいで村に足止めされている。

意味することは一つだ。

「サジャが帰れない・・・！」

客のいない酒場で一人頭をかかえる。

流石に今日ばかりは酒好きな人達も家から出ずじつとしているらしい。

いや、それはどうでもいい。

朝はばつちり晴れてたから欠片も心配してなかったのに、まさかの嵐。

備えに宿屋に泊まれるくらいのお金は持たせてあるが、初めての出来事なのでサジャが心配だった。

ちゃんと泊まれたかな、嵐の日はどこの宿も満杯になるし、いや、同級生の家に泊まらせてもらってる可能性もあるんだから、でも・・。

カラン、と音がしてドアに目を向ける。

「サジャ!?!?!?..じゃない」

酒場に入ってきたのは恋人だった。
がっかりである。

「何の用?」

期待した分、辛辣な言い方になる。

恋人が言うには嵐が酷くて心配だった、戻るのも大変なので泊まらせてほしいと。

苛々と聞いていたら、いつもいる子どもはいないんだからいいだろうと言いやがる。

普段なら大目に見る下心も今の私には非常に腹立たしかったため、タオルを貸して、さっさと追い出した。

次に会うときに別れてやる、と誓う。

また一人になった酒場でうろつくと歩きまわって、際限ない心配を繰り返した。

このまま明日、サジャが帰る時間まで待つなんて出来そうにない。

私は朝一番の馬車に乗って町に行くことを決めた。

17' 1 (後書き)

チャニが町に行く編。

今まで出てきた恋人は全員違う人です。一応。

空は昨日の嵐が嘘のように晴れ渡っていた。
だから馬車も出ただけだね。

町と村を繋ぐのはこの馬車だけなのですれ違う心配はない、
と思いたい。

まあ今日は引き続き学校の日なのでサジャはそのまま登校する
だろう。

夕方までサジャが無事かびくびくするのが耐えられなかった私は
今、馬車に揺られている。

中は嵐で足止めされていたらしい人でいっぱいだった。
隣の観光客っぽい男がやたら話しかけてくるので鬱陶しい。

着いたらまず学校へ行ってみよう。

そこでサジャを待って、でも来なかったら顔見知りの町の酒場へ
行く。

あそこは一日中やってるし、人が集まるので情報も溢れているのだ。

馬車が止まって町についたとわかる。

急いで学校へ行こうとしたが、同乗していた男に引き止められた。
馬車を降りるときに貸してくれた手を取ったのがまずかったようだ。

町と一緒にまわりませんか、としつこいのでやんわり断ると手の甲
にキスされた。

ぎよつとする。この国は恋人同士ですら人前でこんな馴れ馴れしい行為はしない。

偶然目撃した人達も啞然としている。

どうやら異国から来たらしい男はそれを知らないのだろうか。
いや知っててやってるのか？

それなりに整った顔の男は、呆れて物も言えない私を照れてると判断したのか、もう一度手に口を近づけてきた。

よし殴ろう。

自由な手を振りかぶったとき、後ろから腰に誰かが抱きついてきた。

「お母さん！」

驚いて首だけ動かして後ろを見てみると、そこにいたのはサジャだった。

満面の笑みである。

だが、腰に回っている手の力が強くて少々きつい。何か怒ってないか？

「お母さん、迎えにきてくれたの？」

今までに見たことがないほど甘えた感じで首を傾げる。やばいときめいた。

でも腰は痛い。

明らかにサジャの様子はおかしいのだが、かわいくて流されてしまふ。

「あ、うん、サジャが心配で。昨日は大丈夫だった？学校は？」

「知り合いの家に泊めてもらったよ。学校は嵐で窓ガラスが割れて、危険だから今日は休み。ね、お母さん。その人、誰？」

サジャが、私自身存在を忘れていた男に視線を移した。

ぽかんとした表情でサジャを見ていた男ははっとして、私の手を離す。

既婚者でしたかすみません、など小さく言いながら男は去っていった。

男が見えなくなった頃にサジヤは私の腰から離れた。

振り返って見ると、さっきの笑顔はどこへやらすごく不機嫌な顔をしている。

「チャニさん、行こう」

戸惑いながらもサジヤについて行き馬車乗り場から離れた。

人気のない裏路地に着くと、前を歩いていたサジヤは私に向いて言った。

「チャニさん、手出して」

言う通りにすると、逆、と言われたので不思議に思いながらも違う手を出す。

サジヤは片手で私の指先を握って、もう片手で手の甲を擦ってきた。

「サジヤ？」

「・・・・・・・・・・」

まさかの無視。

そして擦る力が強すぎて少々痛い。

サジャが擦るのをやめた頃には私の手の甲はすっかり赤くなっていた。

「サジャ、どうしたの？」

サジャは私の問いには答えず、指先を握ったまま言った。

「手、痛い？」

「ちよつと」

「ごめんなさい」

両手で私の手を包んで額を押し付ける。
なんだかよくわからないけど、反省している様子だったので、余っている手で頭を撫でてみた。

「さっきはありがとうね。あの人、しつこくて困ってたの」

「……恋人じゃなかったの？」

「馬車で会ったばかりよ」

サジャはちよつと顔を上げて、良かったと微笑んだ。
機嫌直ったのかしら。よし、このままいつも通りに！

「恋人なら昨日別れたわ」

ちよつと嘘だ。でもこれから別れるつもりなのでいいだろう。
笑って言うとサジャは予想に反して、機嫌を急降下させていた。

「……やっぱりいたんだ」

小さく呟いて、それきり無言になってしまった。

・
・
・私は何か間違えたらしい。

173 (後書き)

さらっと流すつもりがどうしてこうなった・・・！

悪いのはチャニさんの手にキスした観光客です。きっとそうです。

町編、続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4309t/>

そばにいて

2011年6月10日23時41分発行